

シャガールとマルロー

それはまるで子供が描いたような絵であった。少なくとも絵の構図と発想は、子供の自由な気持ち、限らない夢からでしか思えなかった。マルク・シャガール。ロシア出身（現在はベラルーシ共和国）のユダヤ系画家。歴史に残る世界的な芸術家の一人である。

シャガールの絵は日本でも何度か見たことがある。しかしパリ・オペラ座で見た天井絵は、その大きさと迫力、そして会場の素晴らしさからして度肝を抜かれるものであった。この作品は1964（昭和39）年に、当時のフランス共和国文科大臣でシャガールと親交のあったアンドレ・マルローからの依頼により完成させている。



マルローは私の学生時代から興味を持つ人物の一人。その理由の一つに彼は1974（昭和49）年に日本を訪問するなど、日本文化に深く親しんでいたからである。また彼は作家として「西洋の誘惑」「征服者たち」「王道」そして「人間の条件」など素晴らしい作品を残している。更にマルローはシャガールの作品を展示するための国立美術館の建設を推進。風光明媚な地中海沿岸のニースに86歳の誕生日を記念してシャガール美術館を開設させている。

複雑な時代を、変化の連続の時代を、シャガールはユダヤ人という当時逆境の環境の中で、ロシア、フランス、アメリカなどを舞台に生き抜いた。油彩をはじめ、版画、天井絵、ステンドグラス、彫刻、陶器、舞台装飾に至る幅広い芸術を探求する人生であった。

長寿を全うしニースで永遠の眠りに着いたシャガール。ニース滞在中、私は実感を持って彼を偲ぶことができた。波乱万丈の素晴らしき人生に心からの拍手をしたい。 撮影 2009年冬

